

幼 兒 教 育

第二十卷
第二十二號

大正九年二月十五日發行

我 が 園 保 育 の 近 況

東京府女子師範學校
附屬幼稚園

桃

圃

我が幼稚園の庭は可成りに廣い。然し廣いのみで何等の設備もない。僅かに砂場を有する位のものである。幼兒の遊園としては、誠にもの足り無いが學校の運動場として存する以上、止むを得ぬ事と思ふ。

幼稚園が學校から獨立する迄は、此不備を忍ばねばならぬ。かやうな不平はあるものゝ建て込むだ市内の幼稚園に較べて幸福と感ずる事もないではない。清い空気を呼吸して、青空のもとに思ふ存分駆け廻れる廣やかな運動場を有する事は何よりの幸であらう。幼兒は此頃の寒空にもめげず、戶外に出で、元氣よく遊んで居る。兩頬は林檎の様に活々として居る。兩の眼は水晶と輝いて居る。彼等の健康な顔を見る事は、何よりの悦びである。實に一點の邪心無く、眼に一點の曇りもない。かゝる幼兒の笑顔に迎

へられる先生こそ眞に幸福と云はねばならぬ。私は幼稚園の仕事ほど氣に入つた仕事はない。殊に婦人と生れて常に母性をたゞへる事の出来る此仕事に従事する事を幸福として居る。そして私は神のみたら(幼兒)の良友として恥ぢない人間になり度いと常に思つて居る。

此の度の御たづねに際し、日頃の考の一端を述べ御挨拶と致します。次に認めます記事は、近頃興味を感じた保育の一節で御座いますので御目にかかけました。

十月下旬の事、一夜颱風が我が帝都をおそつた。翌朝登園して見ると運動場のこゝかしこは、水溜りの池をなして居る。紺碧の空は高く、水面には小波さへも無い。あらしの後の静けさは一段である。時

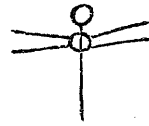
しも何處より飛來せしか赤トンボの一群を見た。次第に數を増し水面かすめてスキ／＼と飛ぶ其輕快の姿よ、日頃無趣味の庭も今日はなかく／＼に趣が深い。道が悪い爲、外遊びを見合せて居た幼兒達は、此景趣をどうしてちつと見て居られ様、忽ち赤シキ赤シキと叫びつゝ、戸外へと駆け出でた。早くも運動場には、トンボ捕りが始まつて居る。氣をもむ先生の心も知らず、水溜りと云はず、泥濘と云はず、トンボの後を、追つて行く、子供の靈は—今やトンボに奪はれて居るのである。私は此の止み難い子供の欲求を、著物や靴が汚れる位の理由で禁止するにしのびなかつた。そこで、著物やエプロンをなるべく短かく、かひ／＼しく出で立たせて、上靴はすべて下履にとり換へさせた。そして思ふ存分にトンボ捕りを行はせた。子供の喜びは非常である。遙かに遠き水溜り迄遠征したのもある。早くも成功して、先生に見せに來るのもある。見れば誰れの發明か、砂篩に砂鏝を挿し、長柄のトンボ捕りを作つて、水に降りたつトンボをふせ様として居る。子供の全精神はトンボに集注されて、驚くばかりの注意が拂はれて居る。見よ、其熱心を、ぬき足さし足で近よりて首尾よく

トンボを打ちふせる迄の其努力を、ふせたるトンボを如何に捕るかを見てあれば、篩は地上をすりて靜かに引き寄せられた。そして周到な注意のもとに手に手をさし入れて漸く／＼に目的を達する事が出來た。此時初めて子供の面上は喜悅に輝いたのであつた。努力の大きい丈に満足も亦大きい。之れを見て私は感じた。幼兒をしてかく迄に慎重の態度をこらしめ、細心の注意を拂はしむるは、かつて不用意に捕りて幾回か失敗した経験のたまものであらう、と、誰れも之れを教へたのではない。事實が之れを教へたのである。經驗して得た知識ほど貴いものはない。幼兒には日常の事にあたり、教へるより實際にふれしめる事が、最も大切である事をしみ／＼感じたのであつた。子供がトンボ捕りに成功した其悦びは、征服者の喜びである。人間界ではむしろ弱者として扱はれて居る子供が、トンボを對照とした時、强者の位置を贏ち得たのである。其満足思ふべしである。子供は今優勝者の誇を感じ、欲求の満足を味ひつゝあるのである。トンボ捕りが精神的にも此の様な得ものをさせて呉れる事を知つた。然しこゝに考へねばならぬ事は强者が弱者にのぞむた場合であ

る。往々強者は自己の力量をたのみ、暴虐の行爲に出る事がある。弱者の苦痛を以て快とする如きは、強者の強者たる所以でない。自己の品性を毀けるものと云はねばならぬ。幼児がトンボに對した時、野蠻性を發揮して之れを虐待して快とする如き事あらば、こは斷じてゆるすべきでない。觀て居る處幼兒等はかゝる殘虐を加へない。むしろ愛玩的動物として之れをいたはつて居る。故にトンボ捕りの遊びが、子供に優者の誇を感じしむることも、決して品性を害するものではないと私は確信して居る。茲に又興味ある子供のトンボ觀なるものがある。トンボは今産卵期に入つて居るので、子孫を産みつけんが爲水溜り指して飛來するのである。子供が「おつながり」と稱するトンボが澤山に來る。子供は一體に珍らしいものを好み、慾張りのものである。一つより二つが好きである處から。此「おつながり」は子供達に非常に歡迎されるのである。此の「おつながり」に付ては別に不審をいだか無い様である。自分達の世界に照して、お友達が仲よく手をひいて來たと思つて居るのが多い。又中には反對に二疋がかみ合つて喧嘩して居ると解して居るものもあるらしい。いづれも「おつ

ながり」の眞實にはふれて居ないが、幼児に生殖方面の事は知らせ度く無いから、却て好都合と思ふ。今の間は幼兒の美しい想像に任せて置くとしやう。トンボ捕りは子供の本能的欲求を満足させて呉れる愉快な遊びであるが年中する事は出來ない。殊に赤トンボの飛來は颱風の後に見る一時的現象であつて、毎年今時分に限つて居る。しかも強い日光は午後ともなると運動場を乾かしてトンボに産卵の場所を失はしめる。地面が現はれ出すと、赤トンボは何處へか飛び去つてしまふ。僅かに半日の遊びに過ぎ無いが、非常に愉快な熱中の遊びをさせて呉れる。我が園の秋の樂しみの一つで私は之れを颱風の土産と呼んで居る。

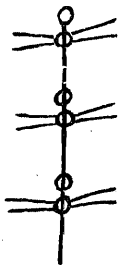
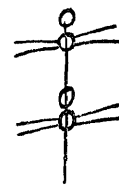
此遊びの行はれた翌日のこと、私は豆とヒゴを用意してトンボの製作を試みた。材料は左圖の如き二寸位のヒゴ一本、一寸五分位のヒゴ四本、豆二粒、とで一疋のトンボが出來上るのである。此の保育は實習中の年若い先生によつて行はれた。昨日の愉快なお話から始まつて、今日の製作に對する幼兒の欲求心を起させ、製作を爲さしめると云ふ計劃であつた。そしてなるべく自發的に作らせる爲にお話の間



に製作品の観察や板畫に就て、トンボの形狀に關する理解や製作上必要な知識やを與へ且つ明瞭にすることにつとめた。そして幼兒の製作心の高潮に達した時材料は配布せられた。此時先生は幼兒に「今お配りしたお箱の中には三疋トンボが作れる丈のお豆とヒゴが入つて居ますから、なくさない様にして下さい。それから先生が今云ふ丈宛、お机の上へお出しなさい。傳へられた。其命令は次の様である。「お箱の中から長い籤竹を一本と短かいヒゴを四本とお豆を二つ丈出して下さい」。幼兒は、先生の言葉通りにした。そこで先生は、其お豆とヒゴでトンボが一疋作れますから、これはない様に作つて御覽なさいと傳へられた。子供は先刻先生からトンボの製作順序を示されて居たので、とる手おそしと作り始めた。此の組は年長組である爲、之れ位の製作は容易であつた。子供は出來上つたトンボをさも満足げに眺めて居る。此時先生は残りのお豆とヒゴで更らに二疋のトンボが作れる事を話して、自由に作つてよい事を傳

へられた。子供は喜び勇むで次の製作を始めた。

此時突然先生に質問を發した子供がある。それは日頃元氣な且さん(男兒)であつた「先生、僕之れを作つたら「おつながり」にしてよう御座んすか」と、年若い先生此幼兒の奇抜な質問に少々あはて氣味で、「いえいけません」と言下に斥けられた。且さんは多少失望をあらはしたが、それでも先生の言葉に順に従つて居た。處が「おつながり」の一言に刺戟された他の幼兒は忽ち共鳴したものと見え、あちこちに、僕「おつながり」にしやう。僕も、私もと云ふさゝやきが起つた。先生の御言葉など耳に入らなかつた様子である。私は子供がどんなものを作るであらうと興味を感じつゝ、見まもつて居た。暫らくすると出來た。次の様な形の「おつながり」があちこちに出て上つた。



之れを見て子供が「おつながり」を如何に解して居るかわかると思ふ。二疋つなげたのは、眼で見た處を正直に寫實したのである。三疋つなげて喜んで居るのは、之れはお友達か仲よく手をひいて飛んで來たとの美しい想像のもとに作つたものであらう。大人が子供に對する時、大人の世界に照して子供の言行を批判し、束縛してはならない。子供には子供の世界がある事を知らねばならぬ。トンボの作製はかくの如く子供を悦ばせ、満足させると共に、私にも亦得る處あらしめたのであつた。(大正八・一二・五)